

きらり

令和8年9・10月
舞鶴市立新舞鶴小学校
通級指導教室 62-4643

「好き」と「嫌い」の間にあるもの

長い夏休みが終わり、2学期が始まってあっという間に1か月が過ぎました。毎日暑かった8月から一転、9月は雨の日が続いています。気温の変化も大きく、体調を崩しやすい時期です。子どもたちも保護者の皆様も、どうぞご自愛ください。

さて、通級指導教室の一角には、絵本コーナーを設けています。月ごとに、季節を感じられる物語や昔話、生き物や食べ物に関する絵本などを並べています。読み聞かせをしていると、同じ本でも子どもたちが興味を持つところや、立ち止まるところがそれぞれ違うことに面白さを感じます。例えば、『すなはまのあな（荒川暢 作）』を読んだときのことです。砂浜で小さな穴を見つけた男の子が、漁師のおじさんのアドバイスをもとに掘り進めていくお話です。

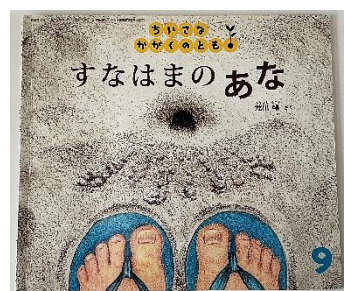
Aさん「すご、こんなに掘るんや。」

担当者「ほんとだね、ほら、男の子の腕まで深くなってる。」

Aさん「砂浜で穴を掘ったままにしたらあかんのやで。落ちたら危ない。」

担当者「そうだねえ。あ、ここに注意書きがある。『最後に穴を埋めましょう』って。誰かが落ちないようにってことやね。」

穴の先に何がいるのかという面白さだけでなく、その後のことまで考えているAさんの姿に、想像力の広がりを感じました。また、Bさんは「僕は、海が嫌い。波が怖いから。」と話していました。ところが話をしていくと、「でも、海の魚釣りは好きや。」とのこと。話をしていく中で、「海は怖いけど、魚釣りは好き」という自分の気持ちに気付くことができました。



私たちは、物事を「好き」「嫌い」とひとくくりにしてしまいがちです。でも実際には、「苦手だけど好き」ということもたくさんあります。作家の辻村深月さんは『あなたの言葉を』の中で、『一度「苦手」と思ってしまうと、だんだんそのことを避けるようになるので、つい「嫌い」と思ってしまいがちなのですが、「苦手でも好きなこと」があるんだと、大人になってから知りました。（中略）あなたが大人になっていく上で、長くあなたを助けてくれるのは、案外、自分の中に残る「苦手だけど好き」「役に立たないかもしれないけど好き」という純粋な楽しみの時間なのかもしれません。』と書いています。



運動会の練習も本格的に始まっています。運動会といえば、競技や踊り、競争を思い浮かべますが、「友達と応援する」「競技や踊りを見る」など、楽しみ方は人それぞれです。「運動会は苦手」とひとくくりせず、その中に自分なりの「好き」や楽しみを見つけられるよう、通級指導教室でも一緒に考えていきたいと思います。



多様な経験を積む ～試行錯誤の積み重ねこそが学び～

高学年になるにつれて見られやすいのが、「知識として覚えていても、少し問題の出し方が変わると答えられない」という姿です。これは国語や算数だけでなく、生活やコミュニケーションの場面でも同じことが言えます。

では、学んだことを新しい場面でも生かし、自分で考えて問題を解決できるようになるには、どうしたらよいのでしょうか。認知科学の研究では、「自分の身体を使って経験し、予測したり試したりしてその経験を広げていきながら学んでいくこと」が大切だと言われています。

例えば、「片付ける」といっても1つではない。



いろいろな「片付ける」場面を見たり、自分でやってみたりすることから、「片付ける」とは何かを少しずつ理解していく。

大切なのは、同じ経験を繰り返すだけでなく、少しずつ違う場面で、多様な経験を積むことです。その中で子どもは、「こうすればできるかな?」「なぜうまくいかなかったのだろう?」「次はこうしてみよう。」と考えながら試します。この試行錯誤の積み重ねこそが「学び」です。

また、学びを支える一番の力は、「楽しい」「もっとやってみたい」という気持ちです。楽しいから学ぶ、学びが楽しいからもっと学びたい、という気持ち。その時、主役は子ども自身であり、大人の役目は「子どもを見守り、必要なときに足場をかけてあげること」です。研究でも、子どもたちだけで好きに遊ぶ場合より、大人がサポート役として遊びをガイドした時の方が学びの効果が大きいことが示されています。

通級指導教室でも、子どもたちが楽しみながら学び、多様な経験を積めるよう、これからも指導・支援を続けていきます。

